

アーサー・ミラー作『るつぽ』について

～「名前」のもつ意味～

多田久恵

1999年3月に開かれた第71回目のアカデミー賞授賞式は、最後の榮譽賞授与の時になって異様な雰囲気にも包まれた。俳優ロバート・デ・ニーロと監督マーティン・スコセッシに伴なわれてエリア・カザンが登場したからである。客席の半分くらいは立ち上がって拍手をしているように見られたが、坐ったまま拍手をするか、あるいは全く拍手をしない人々もいた。とりわけ前列に座っていた俳優たちは、腕組みをし、苦虫を噛みつぶしたような顔で、不快感を露わにしていた。会場の外では授与に反対するデモがあったという。通常、映画界に功労があったとみなされて贈られる榮譽賞授与の場合は、全員が立ち上がって祝福するのが習わしであったから、たまたまテレビを見ていた筆者は、胸がどきどきしたことを記憶している。

エリア・カザン（1909-2003）は、舞台では『欲望という名の電車』や『セールスマンの死』を演出し、映画では『波止場』や『エデンの東』等の監督で知られる50年代、60年代を代表する監督であり演出家であった。その活躍の絶頂にあったとき赤狩りにとらえられ、友人を裏切った密告者として糾弾され、70年代後半には演劇界や映画界から引退し、文筆業に専念していたのである。

アメリカにおける赤狩り旋風は後にくわしく述べることになるが、第二次世界大戦終了後、ソ連と敵対関係に入った、いわゆる冷戦が始まった40年代後半から、共産主義者を追放すべく、あらゆる分野において共産主義者、あるいはかつて共産主義と関わりを持っていた、とみなされた人々に加えられた思想弾圧を指す。教育界、宗教界、マスコミ、映画演劇世界とあらゆる分野におよび、証言を拒否すると投獄され、出所後も職を奪われる、という過酷な迫害であった。とりわけ狂信的なマッカーシー上院議員が糾弾を先導したので、別名

「マッカーシー旋風」とも呼ばれた。投獄を逃れるためには共産主義者であったこと、あるいはその会合に出席していたことを認めるだけでは不十分であった。かつての同志、あるいは友人の名前をあげなければ、罪に問われたのである。

カザンは戦前には短期間ではあるが共産党に入党していたことがあり、社会派、ないしは進歩派の監督と目されていたし、なおかつ興行的にも成功していたから、赤狩りに抵抗するであろうと思われていたのだが、その期待を裏切って、友人の名前を挙げて下獄を免れたのであった。以来、カザンには「裏切り者」あるいは「密告者」というレッテルがついてまわる。カザンの行為をどうみるか、裏切り者として蔑むか、赤狩りの犠牲者の一人として同情するか、あるいは、芸術作品とその作者は別の存在であると客観的に評価するのか、意見が分かれるところであろう。47年たって栄誉賞を授けるというところには、主催者の意思が表明されており、またそれに対する激しい怒りの反応には、どんなに時がたっても許されることではない、という強い反発の気持ちがこめられている、と考えられる。授賞式の異様な雰囲気は、この問題の複雑さ、難しさを如実に表していたと言えよう。

アーサー・ミラー (1915-2005) の『るつぽ』 *The Crucible* は赤狩り旋風が吹き荒れていた 1953 年に上演されている。ミラーはカザンとは親しい関係にあり (『セールスマンの死』の演出はカザン)、また、ミラー自身戦前には共産党の会合に出席していたこともある社会派の劇作家であったから、この赤狩り旋風を他人ごととして見ていたはずはない。『るつぽ』の舞台は 1690 年代のマサチューセッツ州のセイラムであり、魔女狩り騒動を描いたものであるが、理不尽でヒステリックな赤狩り旋風を念頭において書かれたであろうことは想像にかたくない。この作品に込められたミラーの主張は何であったのか、そして、初演から 70 年近く経たぬ今、我々観客はこの戯曲をどうとらえることができるのか、考えてみたい。

『るつぽ』 *The Crucible* ^(注1) は1953年1月22日、ブロードウェーのマーティン・ベック劇場で初演され、同年7月11日まで197回上演された。『セールスマンの死』(1949年初演)の472回の上演回数にははるかに及ばないものの、その年のトニー賞を受賞している。

四幕構成。第一幕から第三幕までは、セイラムの村で少女たちが告発するままだに魔女狩りが始まり、犠牲者が増えていく様が描かれる。第四幕では、魔女と契約を結んだ、と訴えられた主人公プロクターが、生き残ろうと嘘の証言をするか、あるいは、自分の尊厳を守るために証言を拒否して死を選ぶのか、逡巡する内面の葛藤を描いている。

第一幕。魔女騒動は、少女たちが深夜の森で踊りまくり、そのなかの二人が、翌朝意識を失って眠り続けている姿を発見されたところから始まる。牧師パリスは、娘ベティと姪のアビゲイルがその踊りに加わっているところを目撃しており、意識を失ってベッドに横たわる娘を前にして驚き慌てている。小心な男であるパリスは牧師としての自分の責任が問われるのではないかと恐れ、魔女学の権威とされているヘイル牧師を呼びにやる。

少女たちが魔女に呪いをかけられたのではないか、という噂は村中にまたたくまに広がり、村の住民たちが訪れる。セイラムの土地持ちのパトナム夫妻や敬虔なクリスチャンであるレベカ・ナース、好奇心の強いジャイルズ・コーリー、アビゲイルの元の雇い主である農夫プロクターなどである。ジャイルズとパトナムは常に土地争いをしており、会えば必ず喧嘩になるという犬猿の仲である。パトナム夫人は8回も出産したにもかかわらず、一人娘のルースしか成長しておらず、子だくさんのレベカに嫉妬している。プロクターは半年以上前に、召使のアビゲイルと過ちを犯しており、解雇されたアビゲイルはいまだにプロクターに恋心を抱いている。プロクターやジャイルズはパリス牧師が金に関する話しかしないために不信感を抱き、日曜日に教会に行くことを怠っている。パリスもプロクターたちに敵意を抱いており、パトナムとは仲がよい。様々な背景と思惑を抱えて登場する人々は、いわば村を代表する登場人物たちと言ってよい。

ヘイル牧師が到着し、踊りを踊っていた少女たちと黒人奴隷チチュバが呼ばれる。呪文を唱えていたのはチチュバであり、アビゲイル、パリスの娘ベティ、パトナムの娘、そしてプロクターの召使であるメアリ・ウォレンたちが踊りに加わっていたのである。パトナム夫人は死んだ子供たちの霊を呼び出してほしいとチチュバに頼んでいたのであり、そもそもチチュバに、大鍋のまわりでの踊りと呪文を頼んだのはアビゲイルだったのである。

「誰から魔法をかけられたのか？」と、ヘイル牧師だけでなく、パリス牧師とパトナムから厳しい追及と、誘導尋問を受けたチチュバは耐え切れずに、言われるままに何人かの名前を挙げる。

ヘイル：（次第に興奮してきて）おまえは、わたしたちのなかにいる
悪魔の手先を発見するために下された、神の使いだ。お前は選ばれたのだ。…悪魔と一緒に、誰が来たのかね。二人か？三人か？
四人か？

チチュバはあえぎ、前方を凝視しながら、再び体を前後に揺すり始める。

チチュバ：四人でやった。四人。

パリス：（チチュバにつめよる）誰だ？誰だ？名前は？名前をいえ。

チチュバ：あの悪魔めは…ある嵐の夜にやってきて、言うにゃ「見ろ、おれには白人の手先だっているんだぞ！」で、見ると——いたんです、グッドのかみさんが。

パリス：サラ・グッドか！

チチュバ：へえ、それに、オズボーンのおかみさんも。

…

ヘイル：勇気を出して、みんなの名前をいうのだ。平気なのかこの子が苦しむのを見て？

…

アビゲイルが立ち上がり、神の啓示をうけたかのように目を

据えて、叫び出す。

アビゲイル：あたしも告白します。あたしは欲しい、神の御光が、イエス様のやさしい愛が！あたしは悪魔のために踊りました、悪魔を見ました。悪魔の名簿に書きました。あたしはイエス様のみもとに戻ります。…サラ・グッドが悪魔と一緒にいるのを見た！オズボーンのおかみさんが悪魔と一緒にいるのを見た！ブリジェット・ビショップが悪魔と一緒にいるのを見た！（pp.196-197）

アビゲイルが叫んでいるその時、気を失っていたベティがベッドから起き上がり、熱にうかされたような目をして、アビゲイルの呪文のような叫びを引きとり、「ジョージ・ジェイコブズが悪魔と一緒にいるのを見た！ハウのおかみさんが悪魔と一緒にいるのを見た！」と叫ぶ。二人はさらに多くの名前を呼びあげ、「彼女たちの恍惚の叫びのなかで」幕がおりる。

ここで注目したいのは、アビゲイルが「悪魔の名簿に書きました、あたしはイエス様のみもとに戻ります。（I wrote in his book; I go back to Jesus!）」と言ったことである。彼女は自分の名前を書くことにより悪魔に魂を売ったことになるのだが、他人の名前をあげることは神のみもとにもどる儀式である、と宣言しているのである。悪魔と一緒にいた人間の名前を告げることは、もともとはヘイル牧師たちがチチュバに強要したことであるが、アビゲイルは巧みにそれを利用して自分を聖女のように拵えあげるのである。マッカーシー旋風のさなかに、共産党と関わりのある友人の名前を告げる行為を「政府の友好的証人である」と言い換えた非米活動委員会のせりふとまさに同じではないだろうか。

第二幕はプロクター家の室内。病身のエリザベスをいたわるプロクターは優しいが、二人の仲はどこか冷ややかである。エリザベスはプロクターの不義を許しておらず、そのことをプロクターは十分分かっている。村ではもう14人が牢屋にいれられ、正式な法廷が開かれているという。アビゲイルが聖女のようにあがめられているらしい、との噂を聞いたエリザベスは、アビゲイルの仕

組んだ復讐ではないかと疑い、自分も訴えられるのではないかと恐れる。ヘイル牧師が訪れる。彼は、魔女と名指しされた人々が増えていくことに危機感を覚え始めている。敬虔なレベカの名前まででたという。パトナム夫人の赤ん坊を呪い殺したという訴えがあったらしい。ジャイルズが訪れ、妻が魔女だと訴えられたと告げる。以前豚を売った相手から、豚がすぐ死ぬのは、ジャイルズの妻が好きな本で豚に魔法をかけたから、というのが訴えた理由だという。日頃の恨みつらみが、この魔女騒動を利用して吹き出しているようである。

アビゲイルの訴えによりエリザベスが拘引されていく。怒りにかられてプロクターは、ヘイルに向かって次のように叫ぶ。

プロクター：パリスやアビゲイルがはたして無実かどうか、考えてみたらどうか？ 告訴する側は、いつも神聖なのか？ やつらは生まれただけで、神の御指のように清らかとでもいうのか？ セイラムをわがもの顔でのし歩いているのは何か、教えてやろう——復讐という化け物だ。
(p.238)

ヘイル：…おかみさんが有罪か無罪か、わたしには判断がつかない——わからないのです。…最高の判事たちがセイラムに集まり——絞首刑の宣告をくだされようとしている。それだけのことがあったに違いない…そういう原因を考え、それを突き止めるのに手を貸してください。それこそがあなたのとるべき、そう唯一の道です。このような混乱が世界を襲っている時には、…
(p.241)

魔女学の権威であると自他ともに確信していたヘイル牧師は、今や自信を失い、なすすべもない。法廷から疲れて帰ってきたメアリを追及したプロクターは、すべてはアビゲイルが仕組んだことだと聞きだし、エリザベスを救い出すべく法廷に乗り込むことを決意する。

第三幕。教会の一室。隣室では法廷が開かれている。ジャイルズが「トマス・パトナムは土地が欲しいんだ」と叫んでいる声が聞こえる。おそらくパトナム

が誰かの名前を口にしてしているのであろう。土地争いがさらなる魔女告発を生み出している様子がうかがわれる。ホーソン判事と副知事のダンフォースが登場する。彼らが今や正式な法廷の裁判官である。父の代から判事であったダンフォースは、「マーブルヘッドからリンに至る間、400 人の人々を投獄し、72 名を絞首刑にしたのは私である」と告げ、自分の威信を示そうとする。

フランシス・ナースとプロクターは、エリザベス、レベカそしてマーサ・コーリーの無実を証明するために、91 名の宣誓証書を持ってくるが、その 91 名はただちに訊問のため逮捕されることになる。第一幕で少女たちによる名前の連呼が魔女騒動の引き金になったように、91 名の名前の提出は新たな魔女を生み出すことになるのかもしれない。名前をだしたがためにみんなにとんでもない迷惑をかけた、と頭をかかえるフランシスに向かってダンフォースは次のように言う。

いや、別に誰にも迷惑はかからない。この人たちが立派な良心をもっていれば。しかし、わかってもらわねばならぬ、村人たちの立場は一つ、この法廷に賛成か、それとも反対とみなされるかのいずれかだ、中間はない。今はきびしい時代だ、峻烈な時代——われわれはもはや、悪が善と混じって世界をまどわす黄昏に生きているのではない。

(p.261)

黒か白か、右か左か、と迫るのは、分断を狙い、独断を生み、独裁への道を歩むのと同じではないのか。

プロクターは召使メアリに、全てはアビゲイルが企んだことだと告白させる。アビゲイルと少女たちが呼ばれる。ダンフォースから問い詰められたアビゲイルは、逆にダンフォースを脅かし、さらにメアリを脅かし、あたかも魔女に憑りつかれたかのような仕草と声を発する。その仕草と呪いの言葉は少女たちに伝染し、全員がメアリを責める。恐怖にかられたメアリはついにプロクターを、魔女の手先だ、と指さし、アビゲイルの許しを求める。ヒステリー状態になっ

た少女たちの振る舞いを、大人たちはただただ恐怖の面持ちで見守るばかりである。

第四幕。セイラムの牢獄。季節は春から秋に移っている。すでに12人が処刑されており、今日はプロクターとレベカを含め7人が処刑されることになっている。パリス牧師が疲れ果て怯えた表情で入ってくる。姪のアビゲイルが金を持って逃走したことをダンフォースに伝える。村には飼い主のいなくなった牝牛たちがさまよい歩き、今にも暴動が起きかねないほどの不穏な状況になっている、と訴える。

ヘイル牧師は絞首刑を延期するよう嘆願するがダンフォースは受け付けない。「今延期すれば、われわれが恐れて遅延したと思われかねない。刑の執行延期は、今までに死んだ者たちの罪に対し疑惑を投げかけるに違いない。」(p.308)と言って認めない。アビゲイルが逃げて行ってしまった今となっては、真相解明をする手立てはない。ダンフォースにとって大事なことは、裁判官としての自分の体面と権威を守ることである。絞首刑をやめさせるためには、プロクターやレベカたちが自ら「悪魔と交わっていた」と嘘の証言をするのを待つことしかない。

妊娠しているエリザベスが連れてこられる。自分にも落ち度があったこと、今はプロクターに全幅の信頼を寄せており「裁くのはあなた自身しかいない」と告げられたプロクターは、心の重荷をおろし、生きたい、と切実に思う。

「魔女と通じていた」と訴えられたジャイルズが否認を貫き通して圧死したこと、また、敬虔なあのレベカは嘘の証言をすることを拒否し、今はただ静かに死を待っている、とエリザベスから聞かされても、自分にはその勇気がないと認める。一度姦淫の罪を犯したプロクターは、自分はレベカたちのように偉人にはなれない、と自覚する。友人の名前こそ挙げないものの「自分は魔女と会った」と嘘の証言をし、署名する。しかし、自分の名前が教会の掲示板に貼られることを知ると、その紙を破りすてる。

プロクター：神様は、わたしの名前が教会に釘づけになることなんか、

必要となさらない！神様はわたしの名前をごらんになった、私の罪がどんなに重いのか、ご存じだ！それで充分だ！

ダンフォース：プロクター——

プロクター：わたしを利用するのはやめてくれ！。。。

ダンフォース：わしは何も——

プロクター：おれには三人の子供がいる——子供たちにどうして教えられる、人間らしく堂々と生きよと、一方で仲間を売りながら？

ダンフォース：別に仲間を売ったわけではない——

プロクター：ごまかすのはやめろ——仲間たちが沈黙を守り絞首刑になるその日に、これが教会にはりだされれば、おれはみんなに汚名をきせたことになるのだ！

...

みんなに言ってくれ、わたしが告白したと。プロクターは膝を折り、女のように泣いたと。好きなように言うがいい、だが、この名前だけは——

ダンフォース：（いぶかしげに）同じことではないか？私が報告しようと、おまえが署名しようと？

プロクター：（自分でも理屈に合わないことを知っている）いいや、同じではない！他人が言うのと、自分で署名するのとでは同じではない！

ダンフォース：なぜかね？釈放されたら、この告白を否認するつもりか？

プロクター：否認なぞしません！

ダンフォース：では、わけを言え、なぜ——

プロクター：（魂の底からほとばしるような叫び声をあげて）

それが私の名前だからです！一生ほかに名前を持つことができないからです！わたしは嘘をつき、その嘘に自分で署名した！わたしは絞首刑になる人たちの足の塵にもなれない人間だ！名前なし

プロクターが嘘の告白をした自分の行為を認めながら、しかし、名前だけは公表しないでくれと頼むことは、矛盾しているのではないか、と思われる。嘘の告白をした時点で彼はもう裏切り者となっているのであるから、名前だけ残しても、裏切ったという行為を消せるわけではなく、隠しとおせるものでもない。「魂は渡した、名前は残してくれ」(p.329)と頼むのはどういう意味なのであろうか？ダンフォースが理解しなかったように、プロクター自身も混乱しているようにみえる。プロクターはなぜ名前にこだわるのであろうか？名前にどれほどの意味があるというのであろうか？

「名前に何があるの？」“What's in a name”と問いかけたのはジュリエットである。「バラと呼ばれる花を別の名で呼んでも、甘い香りにかわりはない。」とジュリエットは言う。しかし、プロクターにとって名前は魂と同じく大事なもののなのであろう。

nameという言葉は、名詞としては「名前」「呼び名」の他に「名ばかり」「虚名」「見せかけ」という否定的な意味合いを帯びる時もあり「評判」「名声」という肯定的な意味を持つ時もある。複数形の names には「悪口」という意味がある。動詞として使われると「…に名をつける」「…の名を挙げる」「任命する」「名指しで非難する」という意味をになう。name names は「(事件の関係者などの) 名を挙げる、名前を明らかにする、密告する」という意味である。赤狩りの時にカザンがとった行為がまさにこの name names であったのである。^(注2)

プロクターが嘘の証言をしたにもかかわらず署名を拒むのは、それが、アビゲイルがとった行為と同じであることに気がついたからではないのか。第一幕の終わりにおけるアビゲイルの告白「私は悪魔の名簿に名前を書きました」と

言うあのせりふである。プロクターはレベカやジャイルズなど友人の名前をあげることは断固として拒む。それは name names「密告」の行為であるからである。

では自分の名前を書く、署名する、ということは何を意味するのであろうか。第一義的にはアビゲイルのように悪魔の書に署名して悪魔の一員になったことを意味する。しかしそれは同時に、密告したことにもなる。友人を密告したわけではない。自分自身を密告したのである。名前を書くことは魂を売ることと同じである、と気がついたのである。魔女狩りが名前の連呼から始まり拡大し、主人公が最後まで名前にこだわり続けると描くことによって、ミラーは、魔女狩り（さらに言うならば赤狩り）と name names の行為を結びつけようと試みている、と筆者は考える。「魔女狩りとは密告の悲劇」、とミラーはとらえていたのではないだろうか。

赤狩り旋風は共産主義活動を調査するという名目のもとに行われた反共運動であり思想統制であることは冒頭に述べたとおりである。ハリウッドでは1947年と51年から52年にかけて2回訊問がおこなわれた。47年には召喚された45人のうち10人が証言を拒否し獄に下ったのである。いわゆる「ハリウッド・テン」と呼ばれた10人である。出所した後もハリウッドからは締め出され、職を失い悲惨な生活を送らなければならなかった。51年から52年にかけての尋問はさらにきびしく、前回よりも多くの密告者を生み出すものとなったのである。訊問の様子はテレビや新聞・雑誌などを通してはなばなしく報道されたという。

この赤狩り旋風を考えるにあたってS・M・リブセットは、マッカーシー上院議員の以下のような演説の内容に注目したのである。

我が国を敵に売り渡してきたのは、恵まれていない人々ないし少数民族の人々ではなく、この地上でもっとも富める国民が提供してきたあらゆる恩恵——立派な家庭、最高の大学教育、政府部内の立派な職——これらの恩恵に浴していた連中である。

マッカーシーを支持したのは、共産主義思想への嫌悪感であるよりは、上流階級やインテリに対する貧しい白人や少数民族が抱くうらやみであり、妬みであったのではないか、とリプセットは指摘する。^(注3) 優雅な生活を満喫しているだろう、と思われているハリウッドの住民たちは一般庶民にとってはまことに羨ましい存在であったに違いない。

共産党は戦前にあっては合法化されていたのである。政権が変わることによって反対勢力に弾圧がかかることは世界中どこにでもみられることで、別に珍しいことではない。しかし、この赤狩り旋風においてカザンのような密告者だけを糾弾するのはいかなるものだろうか。ブラックリストに載ったというだけでハリウッドは職を奪ったのである。1947年11月24日、ハリウッドの映画製作者たちはニューヨークのウォルドーフ・アストリア・ホテルに集まり「共産主義者、あるいは、アメリカ政府を力または非合法の手段で転覆しようとするいかなる党派やグループのメンバーもこれを雇用しない」という有名なウォルドーフ・アストリア宣言を採択し、実行にうつしたのである。^(注4) ブラックリストに載った人間を雇わない、という取り決めを行い、政府に忠誠を示したのであり、それは共産主義を嫌悪したから、というよりは自分たち自身の保身のためであったろう。赤狩り旋風に乗じて『るつば』に描かれていたように、ライバルを蹴落として、密かにライバルを密告したりすることはなかったであろうか。そして、そういう密告ショーを面白がって眺めていた一般大衆に罪は全くなかったのであろうか。分断を画策したのは為政者であったが、それが成功したのは、様々な分野において協力者がいたからではないのか。

『るつば』初演から3年たった1956年6月、ミラーは非米活動委員会から召喚され、共産党とのかかわりを追及される。「芸術が人生を模倣するのではなく、人生が芸術を模倣するのだ」と言ったのはオスカー・ワイルドであったが、ミラー自身がプロクターの立場に立たされたのであるから、まさにワイルドの言葉通りになった、と言えるかもしれない。しかし、この召喚をミラーは『るつば』を執筆していた時にすでに予測していたはずである。

1952年、この年はカザンが召喚された年であるが、『るつば』執筆のための

資料を探しにセイラムに向かっていたミラーは、カザンから自宅に寄ってほしいと頼まれカザンに会う。カザンが召喚され友人の名前を告げた、と打ち明けられる。カザンと同じく旧友のクリフォード・オデッツ（『醒めて歌え』（1935年）や『レフティを待ちつつ』（1935年）を執筆し、社会派とみなされていた劇作家）の名前もあげた、と聞かされる。カザンはオデッツと示し合わせてお互いの名前を告発しあったのであるが、当時はこういうことはよくあったらしい。カザンやオデッツのように共産党に入党していなかったものの、ミラーも共産党主催の集会には何度か顔をだしていたので、いずれ自分にも召喚状が届くだろう、と覚悟を決めていたことだろう。劇中のプロクターが直面する問題は、まさに未来におけるミラー自身の問題でもあったのである。

ミラーは訊問を受けた際に、共産党の集会に出席したことは認めたが、他の出席者の名前をあげることは拒否したので法廷侮辱罪に問われる。罰金と禁固刑を言い渡されるが控訴して、2年後に無罪を勝ちとる。ミラーはなぜ無罪になったのか。その当時マリリン・モンローと結婚していたからなのか。あるいはマッカーシー上院議員が54年にすでに失墜していたからなのか。主役というか敵役というか、花形役者がいなくなり、観客もそろそろ飽きてきたエンターテイメントはいずれ消滅する運命にあったのだろう。犠牲者だけが残ったエンターテイメント・ショーがやっと終わったのである。

『るつぽ』は『セールスマンの死』とともに再演されることの多い作品である。ミラーの代表作は？と問われたら、筆者はすぐに『セールスマンの死』をあげたいと思う。しかし、イギリスの劇評家マイケル・ピリントンはその著『101の偉大な劇作品—古代から現代まで—』において、ミラーに関しては『るつぽ』をあげている。（ちなみにアメリカ人作家の作品では、ユージン・オニールの『夜への長い旅路』、テネシー・ウィリアムズの『欲望という名の電車』、エドワード・オールビーの『山羊』をあげている。）

ビリントンは、「上演される時代と状況によって異なる意味を持ちえることが偉大な劇作品の条件である」としたうえで、2002年ドミニック・クック演出によるRSCの再演を観たときの感想を述べている。ダンフォースのセリフを聞きながら、イラク戦争を始めようと意気込むブッシュ大統領の勇ましい演説を想起した、という経験である。^(注5)

同様のことをミラー自身が語っている。1980年上海での上演を見たある中国人作家は、文化大革命のため6年半を独房に閉じ込められ、さらに娘を文革で失ったのだったが、「中国人でもないのにこんな劇が書けるとは信じられない、訊問のやりかたは文化大革命中のそれと全く同じだった。」とミラーに語ったそうである。^(注6)

「この劇が突然ヒットするような時には、その国の政治的状況がおのずから判る——台頭しかけた独裁制に対する警告か、過ぎたばかりの専制政治の名残りである。」^(注7) というミラーの言葉が伝える意味は極めて重いと言わざるをえない。

使用テキストは *The Crucible in The Portable Arthur Miller* (Penguin Books, 1997)

テキストからの引用は倉橋健訳「るつぽ」『アーサー・ミラー全集Ⅱ』（早川書房、2001年改訂3版）を使用。

注(1) crucible には①「るつぽ」（大勢の人が熱狂している状態や場所、あるいは種々のものが混じっている状態や場所）という意味の他に②「厳しい試練」という意味もある。ミラーは両方の意味を含む言葉として題名に選んだのであろう。

(2) アメリカの雑誌『ネーション』の編集長であったヴィクター・S・ナヴァスキューは、赤狩りととらえられた人々の詳細な記録とインタビューをまとめて出版したのであるが(1980年)、そのタイトルは *Naming Names* であり、翻訳された題名は『ハリウッドの密告者—1950年代アメリカの異端審問—』である。(三宅義子訳、論創社、2008年)

(3) S・M・リブセット「極右勢力の社会的背景」『保守と反動』（みすず書房、昭和33年、

p.165)

- (4) 川本三郎『映画の戦後』（七つ森書館、2015 年、p.217）
- (5) Michael Billington: *The 101 Greatest Plays from Antiquity to the Present*, (Guardian Books and Faber &Faber, 2016, p.343)
- (6) 『アーサー・ミラー自伝』下巻（倉橋健訳、早川書房、1966 年、p.92）
- (7) 『アーサー・ミラー自伝』下巻（p.91）